

10月15日
報告

「第16回 中国人受難者を追悼し 平和と友好を祈念する集い」など報告

杉原 達

10月15日（日）、「中国人受難者を追悼し平和と友好を祈念する集い」が、安芸太田町中国電力安野発電所そばの小高い丘にある「安野 中国人受難之碑」前で催された。今回で第16回目の開催となる。

前日の天気予報では気温が下がる見通しで、広島市内を出る時はしっかりと服を着こんだが、幸い晴れ間もあり風も弱くて現地では快適な天候に恵まれた。若い参加者の中には半袖シャツなど軽装の人たちもいて、その元気さには目を見張った。

「集い」は、岡原美知子さんの司会のもとで黙祷から始まった。主催者である継承する会の足立修一



世話人代表の挨拶のあと、安野中国人受難者遺族の張振倫さん、安芸太田町の橋本博明町長、地元・善福寺の藤井慧心住職、広島県教職員組合の頼信直枝委員長、中国駐大阪総領事館の薛劍総領事の挨拶（代読も含む）が続いた。

そして例年通り、竹内ふみのさんが二胡で「陽関三疊」を演奏された。そのあと献花へと進み、参列者全員が二胡の味わい深い音色に包まれながら献花をすませて、「集い」は無事に終了した。

その後、参加者の多くが善福寺へ移動して追悼法要に臨んだ。藤井住職による「阿弥陀経」の朗々た

る読経の流れる中、例年通り中国式と日本式の焼香をゆっくりとささげた。献花や焼香は、どうしても儀式ばった感じがするものだ。だが善福寺での焼香



は、参加者一人ひとりの思いが自然な形で所作にあらわれるひとときであるように私には思える。それは本堂のたたずまい、住職のお人柄、いくつも並べられた小さな座椅子などが醸し出すおだやかな雰囲気によるものだろうが、加えて善福寺には、安野で亡くなった中国人のうち5人の遺骨を、三代前の住職が預かって保管された経緯がある。こうした歴史が、世代を継いで数十年にわたって人びとをつないでいくものだなと改めて感じた次第である。

「集い」での出会いを記したい。来賓のひとり梶谷俊造さん（元安芸太田町社会福祉協議会長）は、ダンディな帽子、スーツ、靴に身を包んで来られた。2009年の和解成立後、記念碑建立のために骨を折ってくださった梶谷さんには、昨年この場で再会し、今回も平和運動に関心を持つお孫さんの活躍ぶりを聞くことができ、旧交を温めることができた。その容貌をみて、私は、昨年集会「和解を導いた力 Part 2 邵義誠さんの闘いをふりかえる」に天津からリモートで参加してくださった娘の邵莉娜さんが、1998年に戦後初めて訪日する父親のために服

装一式を新調したというエピソードを思い出した。邵義誠さんと今回の梶谷俊造さんの風貌が、偶然ながらもいぶん似ているからである。梶谷さんは来年に米寿を迎えられる由、またお話をうかがうことが今から楽しみである。

今回の集いでは、コロナ禍で中止していたふたつの企画が、4年ぶりに再開できた。ひとつはフィールドワークの復活であり、もうひとつは広島駅と安野との往復バスの復活である。

まず坪野フィールドワークは、川原洋子さんの案内で、安野発電所、記念碑を見た上で貯水槽に登った後、再び碑の前に戻って内田喜美子さんの証言を聞くという内容だった。内田さんの証言を紹介する



——「1945年当時、私は3歳でした。家が土居の中国人収容所の近くにあったので、日本敗戦後、解放されて自由になった中国人3人が自宅に来たことがありました。中国人たちは家に上がってきて、母と筆談をして大豆がほしいと言いました。母が大豆はないと言うと、豆はあるかと聞いたので、母は豆をあげました。中国人はそれから、庭になっていた梨を採りました。もう少し熟してから食べようともがずにいた梨を、中国人が採ってしまったので、私はくやしくて泣きました。それから縁の下で飼っていた鶏がコケーッと鳴いたので、中国人は鶏を1羽、足をつかんで逆さに持ち、羽をバタつかせて鳴いている鶏を持って帰って行きました。飼っていた鶏で愛着があったので、私はわんわん泣きました。

中国人たちが帰ってから、母は『あの人たちは可哀そうな人たちだから』と言って、私をなだめました。」

解放後ようやく自由に歩くことができた中国人たちやお母さんの態度など、暮らしの中の出会いのひとつが、3歳の内田さんの中に深く刻まれたのだろう。内田さんは山口県美祢市在住で、2010年の記念碑除幕式のとき以来、2回目の参加をされた。

なおこのたび「安野マップ」を改訂した新しいフィールドワーク資料が発行されたので、今後の活用が大いに期待できる。

次に往復バスについて。往きの安野行きのバスでは、自己紹介のあと「和解～広島・中国人強制連行問題の軌跡」（RCC中国放送制作、2014年放送）のDVDを鑑賞した。これは第6回訪日団を取材したもので、当時険悪だった日中関係の中で民間交流の意義を丁寧に報道した番組であり、緊迫する日中の現状にも重なる内容であった。

帰りの広島行きのバスでは、前日に秋田県の「尾去沢鉦山中国人殉難者慰霊祭」に参加し、この日の朝に安野にかけつけた内田雅敏さん（元西松安野友好基金運営委員長）から、慰霊祭の様子についてホットな説明を受けた。中国からは山東省を中心に約40人の三菱マテリアル関係の遺族が参加し、強制連行された全員の名前を記して建立された碑の除幕式が開催されたとのことであった。鹿島、西松、三菱マテリアルと続いてきた中国人強制連行問題の和解と和解事業の流れが、少しずつ前進していることを具体的に聞くことができた。

「安野 中国人受難之碑」と善福寺は、中国人強制連行の痛苦の歴史を想起するとともに和解の意味を改めて考えようとするときに、非常に大切な場である。来年こそは、中国から再び遺族をお招きして、ともに安野発電所周辺を歩き、記念碑の前に立ち、善福寺の追悼法要に参加できたらと願う。